島根県古代文化センター研究論集　第 34 集
「島根県域における弥生社会の総合的研究」抜刷

弥生時代の鉄器流通からみた山陰と近畿

会下　和宏

弥生時代の鉄器流通からみた山陰と近畿

会下　和宏

はじめに

令和３～５年度に行われた島根県古代文化センター・テーマ研究「島根県域における弥生社会の総合的研究」では、島根県出雲市荒神谷遺跡および島根県雲南市加茂岩倉遺跡における大量青銅器埋納の時代的、社会的背景について解明することが研究目標の一つであった。両遺跡から出土した大量の銅鐸のなかには、近畿中部で製作され、出雲にもたらされたと推定されるものが多く含まれている。これらの銅鐸やその他青銅器が埋納された時期は、弥生中期後葉から後期初頭（岩永1995）ないし、弥生後期前葉（北嶋2010・2023）とみる説が有力である。二つの遺跡における圧倒的な量の青銅器埋納は、通常の弥生時代青銅器埋納行為からはあまりにも逸脱した事象であり、その背景を読み解くことは、筆者の力量の及ぶところではない。せめて、当該期における様々な汎西日本的な地域間交流の状況を俯瞰することで、その手掛かりを少しでも得られればと考える。

筆者は、これまで弥生時代の鉄器流通の様相を具体的にみてきたので（会下2019・2020・2023）、本稿では、既往論考に追加する形で近畿地域における集落遺跡出土鉄器の様相も包括して整理し、そのうえで、当時の山陰と近畿との地域間関係についてアプローチし、上記の遠大な課題にも迫りたい。また、汎西日本的視座から俯瞰するために、四国北部の様相も含めて分析する。なお、本稿では、筑前・唐津湾沿岸を九州北部、石見・出雲・隠岐・伯耆・因幡を山陰、備中南部・備前を吉備南部、伊予・讃岐・阿波を四国北部、但馬・丹後・丹波を近畿北部、播磨・淡路・摂津・山城・近江・河内・和泉・大和を近畿中部、紀伊を近畿南部とする。

１．研究史と問題の所在

弥生時代の鉄器を遡上に載せた研究として、前稿（会下2019）でもふれたように、その普及過程についての問題がある。松井和幸氏は、九州北部・近畿・東日本における石器・鉄器の出土状況を概観し、近畿では九州北部に比べて鉄器出土量が圧倒的に少ないこと、弥生中期後葉頃に鉄器製作が開始されること、弥生後期には刀子・手斧類を中心とした加工工具類が比較的早く鉄器化し、鉄斧の補完として蛤刃石斧が残存することなどについて指摘している（松井1982）。山田隆一氏は、近畿中部における弥生後期・終末期の鉄器化の状況について、石器の出土状況から、「一定の鉄器化を認めつつも、その背後には常に鉄の絶対的不足」を想定する（山田1988）。また、村上恭通氏は、古墳時代初頭に羽口や大量の鍛造剥片・鉄滓を伴う鍛冶遺構が、山陰・瀬戸内・近畿・関東に認められることから、この時期に播磨－讃岐－阿波ラインを越えて、近畿以東へも鉄器生産が急速かつ広汎に伝搬したことを認めた。とはいえ、「各地における鉄器の普及については、弥生時代の状況を一挙に払拭するには及ばす、格差とグラデイションが依然として認められ」るとしており、弥生時代の段階では、播磨を除く近畿中部においては鉄器普及が希薄であったとしている（村上2000）。寺沢薫氏は、川越編2000をもとに作成した弥生時代日本列島における地域ごとの鉄器出土量を図示し、瀬戸内以東と九州北部とでは雲泥の差をもって前者の出土量が少ないこと、弥生後期に石器が激減するとみる解釈についても再検討の余地があることを述べた（寺沢2000：pp.212-216）。

こうした意見の一方、禰宜田佳男氏は、石器の激減という状況証拠から、弥生後期にはすでに「鉄の流通システム」へ移行していったとの論陣をはってきた（禰宜田1998など）。近畿には、鉄器が出土しない何らかの要因があることに加えて、弥生後期には、「石器の生産と流通のあり方を変える量」、言い換えると「石器に頼らなくてもいい量」の鉄器が供給されていたと評価する（禰宜田2019：p.113）。

また、通時的にみた場合、近畿における鉄器化の過程を下記の４段階で整理している（禰宜田2019：

pp.108-110）。第Ⅰは、鉄器使用が始まった段階で、弥生中期前葉から中期中葉にあたる。出土遺跡および点数は少なく、鋳造鉄斧およびそれを再加工したものが中心である。第Ⅱは、鉄器普及が始まった段階で、弥生中期後葉にあたる。器種としては、斧・鉇などの工具が中心で、武器としては鉄鏃がみられる。第Ⅲは、石器から鉄器へ主要利器の転換があった段階で、弥生後期前葉から中葉にあたる。器種としては、鉄鏃・鉄剣などの武器、板状鉄斧・鉇・刀子などの工具や鉄鎌が出土し、後期中葉には鋤・鍬先などの農具が加わる。鉄器を補完する形で、石器も残存し、銅鏃・木包丁など多様な道具が併用されていたが、「鉄器が主、石器が従」の段階となる。第Ⅳは、鉄器化が達成された段階で、弥生後期後葉にあたる。一部を除いて石器が消滅していることが主な根拠となっている。

また、近畿における鉄器器種の地域性、分布の様相については、下記のような研究がある。野島永氏は、近畿を北部と中部とに分けて、1990年代半ばまでにおける弥生時代の鉄器出土状況を概観し、その様相について以下の通り整理した（野島1996）。分布をみると、近畿中部では、弥生中期末における西摂から播磨一帯にかけての高地性集落出土遺跡、弥生後期における淀川流域や旧大和川流域低地の大集落遺跡に出土事例が多くみられる一方、近畿北部では丹後の竹野川流域、但馬の円山川流域における墳墓出土事例が多い。器種組成は、鉄鏃では有茎の腸抉三角形式鉄鏃が特徴的な形式としてみられること、工具では板状鉄斧・鉄鑿が多く、袋状鉄斧・袋状鉄鑿・鉇の出土例が多い瀬戸内西部・九州北部とは異なっていることなどが指摘されている。松木武彦氏も、有茎の三角形式鉄鏃は、弥生中期中葉の近畿中部のものが古く、弥生後期にかけても近畿中央部を中心に分布するとしている（松木2003）。村上恭通氏も、日本海沿岸地域を除く近畿以東の鉄器組成について、「弥生中期末以降、鏨切り製鉄鏃、板状鉄斧、鉇、鑿など扁平な鉄製品が卓越し、それに鋳造鉄斧や重厚な板状鉄斧のような舶載鉄器が稀に加わる」とし、板状鉄斧が多い点などを指摘している（村上2007：p.97）。

また、近畿における鉄器の流通ルートについての言及には下記のものがある。福永伸哉氏は、弥生後期おいて、近畿中部の鉄器が、近畿北部から流通していたと言及し、その主要ルートの一つとして、丹後半島の付け根から由良川を遡上し、福知山盆地、亀岡盆地を経て、保津川沿いに京都盆地へ出る経路をあげている[(1)]（福永2000）。加えて、因幡の千代川沿いから播磨西部へ向かうルートにも注目し、こうした鉄器入手ルート上に突線鈕式銅鐸が分布していることから、「見る銅鐸」と形容されるこの時期の銅鐸が、「鉄器流通網の形成などを通じて政治的なまとまりを強めた弥生後期の畿内地域の首長層が、同盟のシンボルとして採用した器物」であったと評価している。禰宜田佳男氏も、兵庫県佐用町本位田権現谷Ａ遺跡など、播磨内陸部に位置する鉄器製作遺構を有する遺跡に注目し、「近世出雲街道」を介した出雲・伯耆から、あるいは鳥取平野・千代川流域を介した因幡から播磨への鉄器流入の可能性に言及している（禰宜田2019：p.298）。さらに、本位田権現谷Ａ遺跡の近隣から突線鈕４式の下本郷銅鐸が出土していることから、鉄器の生産･流通と「見る銅鐸」の配布とが関連性をもっているとして、福永氏の説に同調した。筆者も、鳥取県天神川およびその支流の加谷川を遡上し人形峠を経て、岡山県側の吉井川最上流域に至るルート、あるいは鳥取県日野川を遡上して四十曲峠を越える「近世出雲街道」ルートで津山盆地に至り、さらに播磨へと向かうルートを通して、山陰から播磨に向かって鉄器が流通したことを想定した[(2)]（会下2020）。一方、近畿南部の紀伊では、弥生後期中葉以降、袋状鉄斧や鉇に四国南半地域との類似性がみられることから、この地域からの影響関係が示唆されるとしている（村上2007：pp.96-97）。

以上の議論を深めていくうえでは、禰宜田佳男氏が推進しているような、弥生中期・後期のなかの各細別時期における鉄器・石器の具体的出土事例を正しく把握し、それに即した議論をしていく必要があろう。筆者は、九州北部（図４）・中国（図５・６）・北陸における細別時期ごとにみた集落遺跡からの鉄器出土状況を整理し、出土量・器種構成・分布状況を示したうえで、弥生時代における鉄器普及過程として、弥生前期末葉から中期初頭の第１波、弥生中期後葉の第２波、弥生後期後葉から終末期の第３波とした鉄器流通量増加の画期があったことを指摘した（会下2023）。また、こうした画期の遠因の一つを鉄器供給元の朝鮮半島に求め、第２波は楽浪郡の設置による鋳鉄脱炭鋼製素材の列島への流入、第３

波は朝鮮半島における塊煉鉄製素材などの生産量増大があったことを推定した。

近畿における鉄器の普及状況・器種組成・流通ルートについて議論するうえでも、こうした細別時期ごとにみた出土量・内容を把握し、他地域の状況と比較する必要がある。その際、近畿地域内部を通時的にみた場合における石器から鉄器への移行過程とその歴史的評価、近畿以外の他地域を包括してみた場合における鉄器の地域性・流通量・流通ルートの復元という二つの視点による解明課題があげられる。本稿では主に後者に力点を置いて考察を加えたい。

２．近畿・四国北部における鉄器の出土状況（図１～３、７～９）

ここでは、弥生時代の近畿および四国北部の各細別時期における集落遺跡出土鉄器点数の推移を定量的に概観したい[(3)]（図７～９）。ここで対象とした鉄器は、器種が明確に特定でき、所属時期が註３の表１・２に示したそれぞれの細別時期の中に限定できるもののみとしている。所属時期が絞り込めないもの、さらに鉄片や鉄針など、および墳墓副葬鉄器については対象外とした。鉄器は、土器・石器などと比較すると、埋没環境によっては腐食してしまい、残存しない場合が想定される。本稿では、こうしたバイアスを考慮しつつ、現時点で判明している鉄器出土資料をなるべく多く集成することによって実態に近づくことを目指した。

（１）近畿北部（図８）

この地域では、弥生後期初頭以降、墳墓に副葬された鉄器が潤沢にみられるものの、集落出土鉄器については傾向を掴める程の事例に乏しい。しかし、弥生前期後葉から中期前葉の京都府京丹後市扇谷遺跡（図１-１-１）や弥生中期中葉の京都府与謝野町日吉ヶ丘遺跡（図１-２-１）で鋳造鉄斧片の出土があるなど、早い時期から丹後半島周辺での事例がみられる。

また、わずかな事例ではあるが、円山川水系最上流域の兵庫県朝来市栗鹿遺跡（図２-１-２）、由良川水系最上流域の兵庫県丹波市国領遺跡（図２-１-３）・同七日市遺跡など、但馬・丹波の内陸部でも弥生後期の鉄器出土事例がある。このことから、播磨・摂津北部の市川・加古川・武庫川中・上流域で出土する鉄器は、瀬戸内海経由のほかに、日本海側から円山川水系ルートないし、由良川水系ルートあるいは福田川・竹野川・野田川から由良川に合流するルートで生野北峠・遠坂峠・「石生の水分れ」などを経由してもたらされた可能性を想定しておく必要があろう[(4)]。

今後は、集落遺跡調査事例の増加を待って、鉄器の普及・流通状況を再検討していく必要があるほか、墳墓副葬鉄器との比較検討なども課題としておきたい。

（２）近畿中・南部（図９）

この地域では、弥生中期中葉から鉄器が散見されるようになる。続く弥生中期後葉には、飛躍的に出土遺跡・出土量が増加しており、九州北部・山陰・吉備南部で認められた鉄器流通第２波（会下2023）が近畿中・南部にも波及していることが分かる。弥生中期後葉の器種組成は、鏃、鉇・刀子などの工具、板状鉄斧が大半を占めている。なかでも板状鉄斧の出土量の多さは当該期の特徴といえ、特に播磨・摂津に多く分布する。当該期における鉄斧出土量のうち、板状鉄斧と袋状鉄斧を比較した際の前者への偏重は、山陰・吉備南部においても認められる傾向である。

弥生後期初頭から前葉では、出土遺跡・出土点数とも前時期と比較して減少している。特に、播磨・摂津の播磨灘北岸・大阪湾北岸における出土遺跡分布の希薄化（図２-１）、出土量の減少がみてとれ、画期の一つとして認識しておきたい。当該期は、山陰地域でも出雲の斐伊川流域、伯耆の日野川下流域や大山北麓において鉄器分布が希薄化しており（図２-１）、後述するように近畿中部と山陰の連動した現象の可能性がある。

弥生後期後葉には再び増加がみられ、九州北部・山陰・北陸・吉備南部で認められた汎西日本的な鉄器流通第３波（会下2023）に同調している可能性がある。特に淡路島・淀川流域・大阪平野縁辺に分布

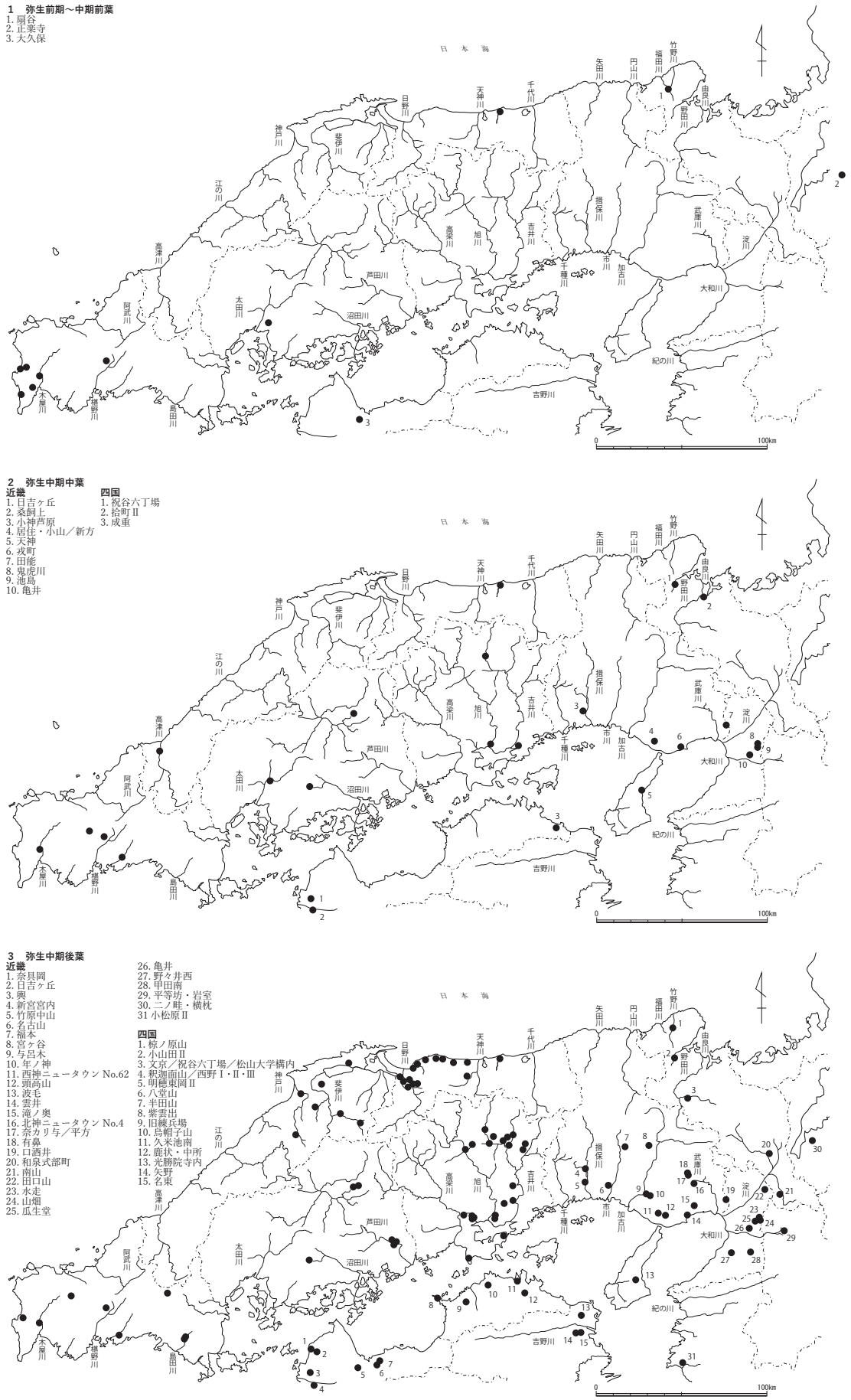
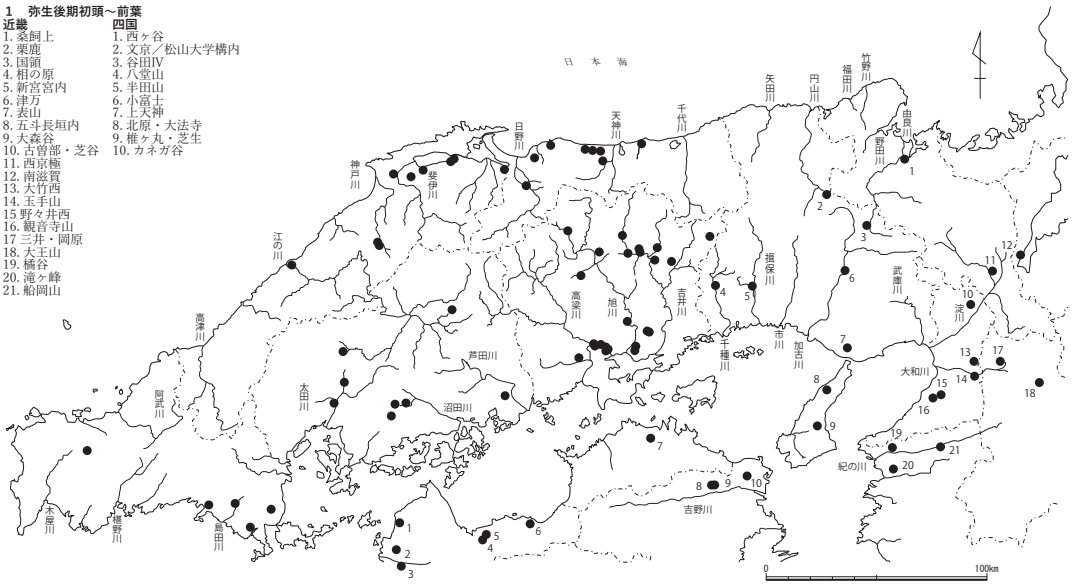
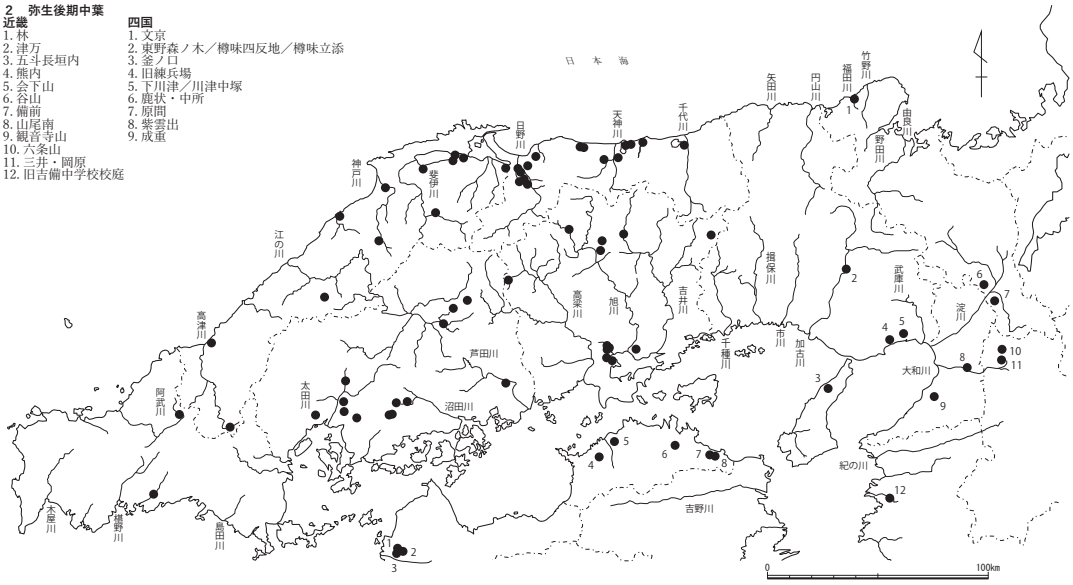


図１　鉄器出土集落遺跡の分布（その１）





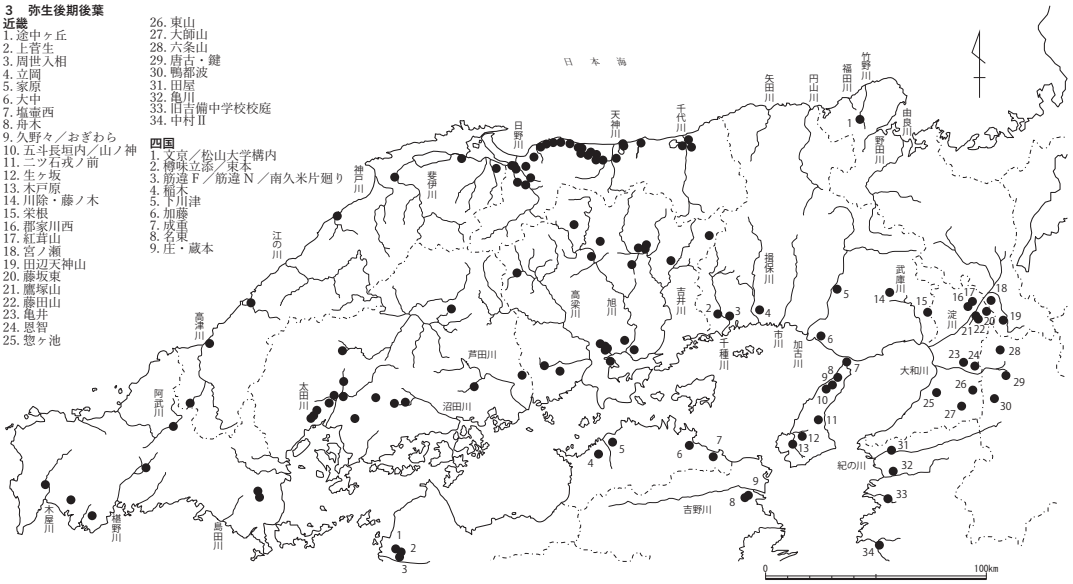


図２　鉄器出土集落遺跡の分布（その２）

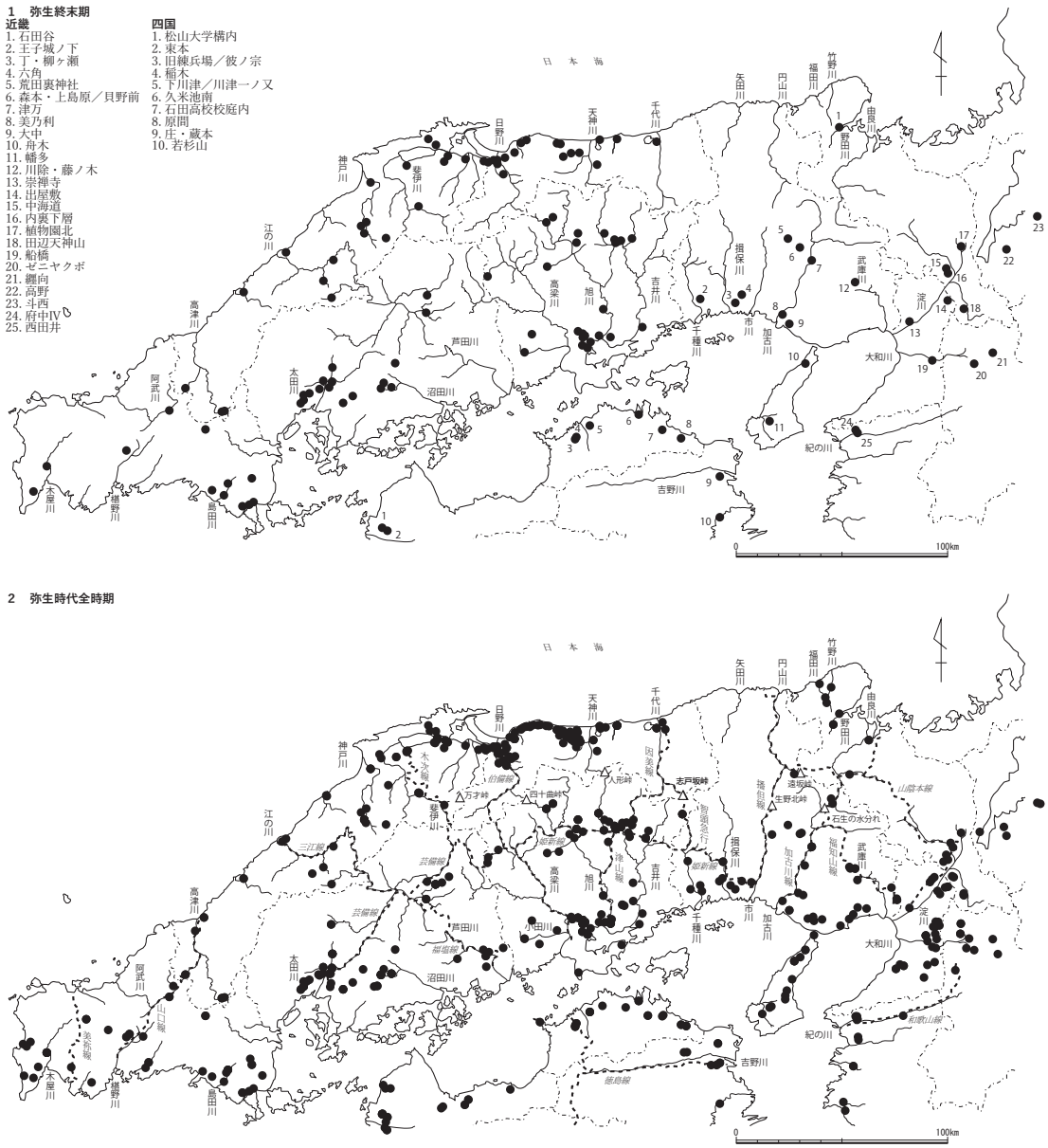


図３　鉄器出土集落遺跡の分布（その３）

が多い（図２-３）。とはいえ、当該期の鉄器総点数は、九州北部・山陰と比較すると半数にも満たない。さらに、現状の資料では、終末期に再び出土点数が減少に転じており、この時期に至っても鉄器の流通と普及がいまだ不安定であったことを示唆する。九州北部、吉備南部以西・四国の瀬戸内海沿岸、山陰・北陸など、西日本他地域で認められる終末期におけるさらなる鉄器増加とは対照的である。また、弥生後期から終末期における器種組成は、鏃および鉇・刀子などの工具が大半である。なお、弥生後期中葉の兵庫県芦屋市会下山遺跡（図２-２）や終末期の兵庫県淡路市舟木遺跡（図３-１）では釣針・ヤスなどが出土しており、漁撈具の鉄器化が散見される。

（３）四国北部（図７）

弥生中期前葉では、愛媛県西条市大久保遺跡（図１-１-３）で出土した鋳造鉄斧の破片やこれを再利用した鑿・板状鉄斧の点数がグラフに現れており、九州北部でみられた鉄器流通第１波（会下2023）に同調するものといえる。その後は、弥生中期後葉および、弥生後期後葉から終末期にかけての出土点数の増加が、それぞれ鉄器流通第２波・第３波（会下2023）に相当する可能性があろう。弥生中期後葉における板状鉄斧、弥生中期後葉から終末期における鏃および鉇などの工具の出土は、安芸・吉備南部（図

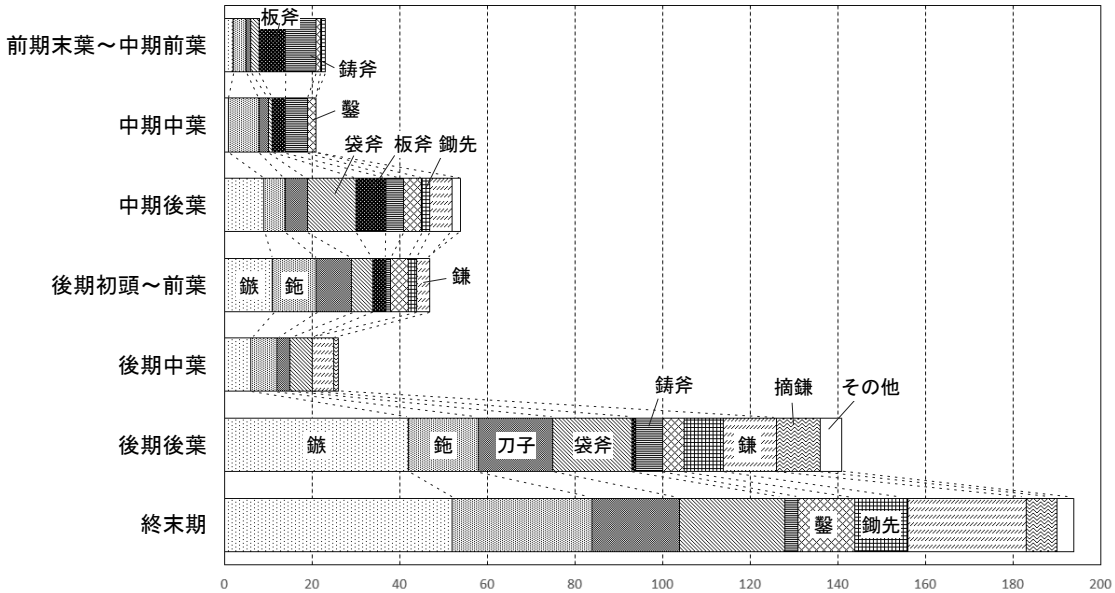


図４　弥生集落遺跡出土鉄器の点数（筑前・唐津湾沿岸）

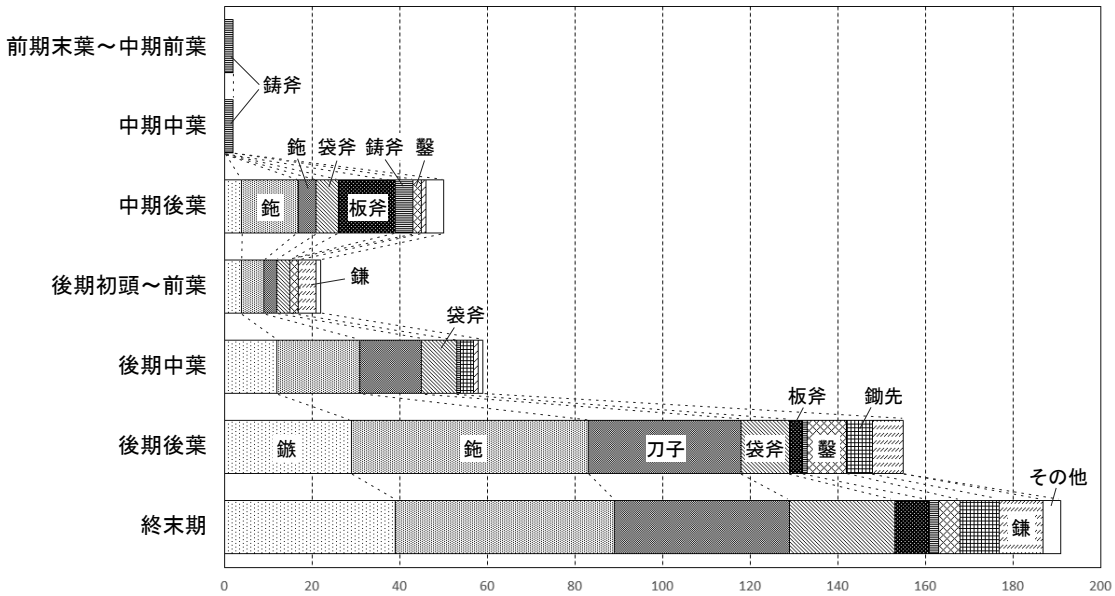


図５　弥生集落遺跡出土鉄器の点数（山陰）

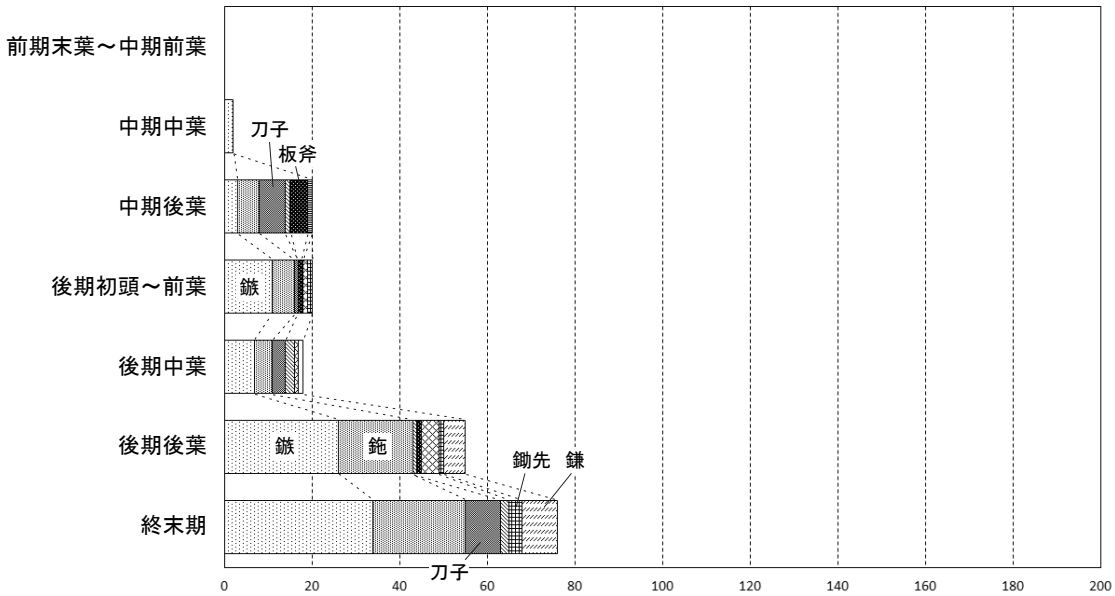


図６　弥生集落遺跡出土鉄器の点数（吉備南部）

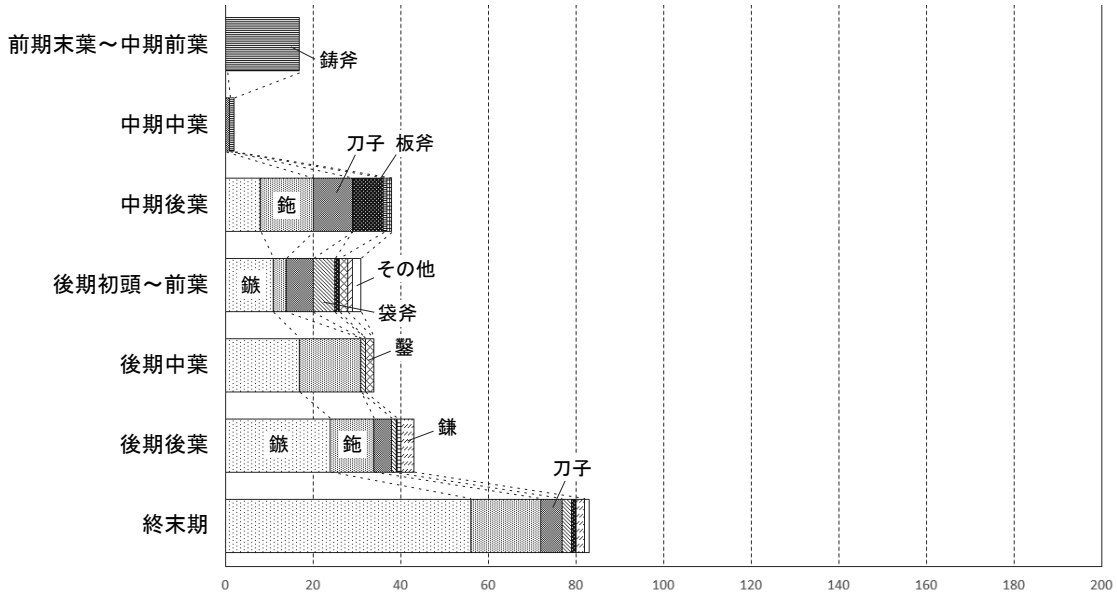


図７　弥生集落遺跡出土鉄器の点数（四国北部）

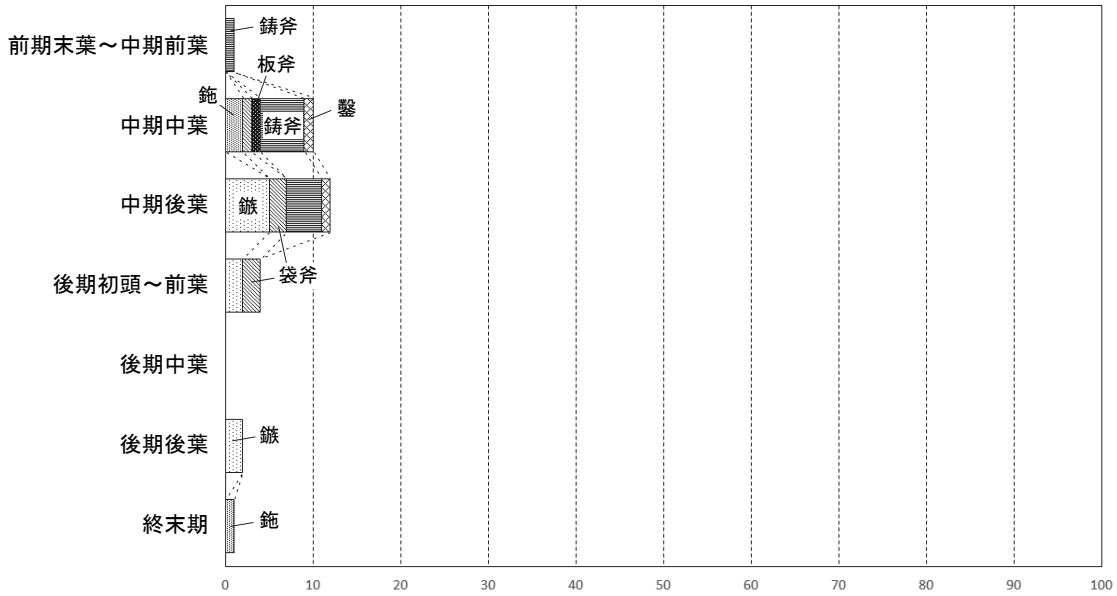


図８　弥生集落遺跡出土鉄器の点数（近畿北部。横軸最大値 100 点）

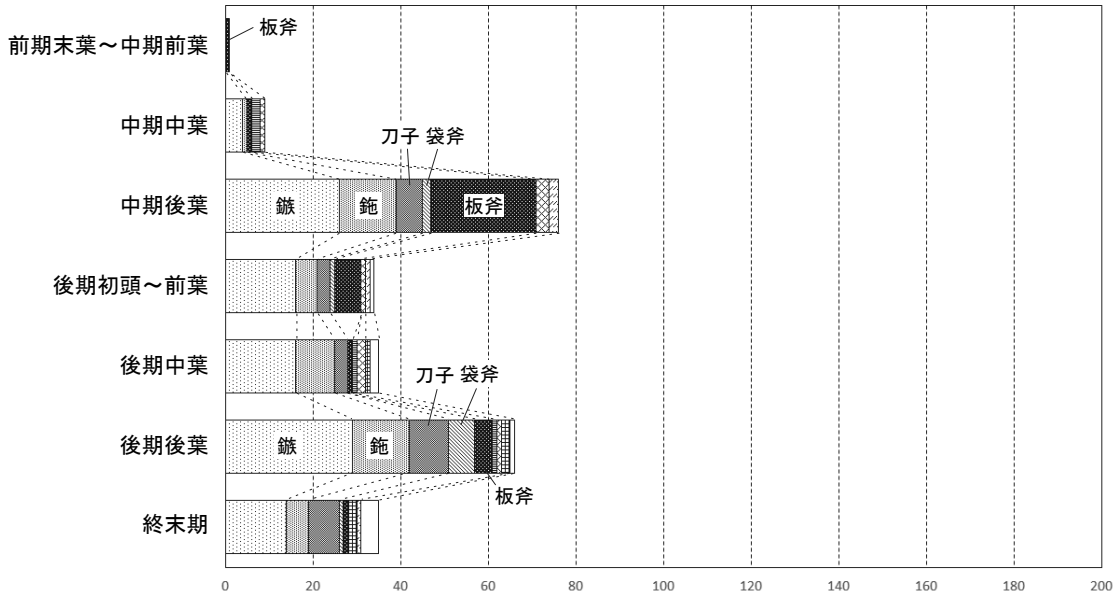


図９　弥生集落遺跡出土鉄器の点数（近畿中・南部）

６）など瀬戸内海北岸地域と概ね類似した器種組成を示していよう。

（４）小結

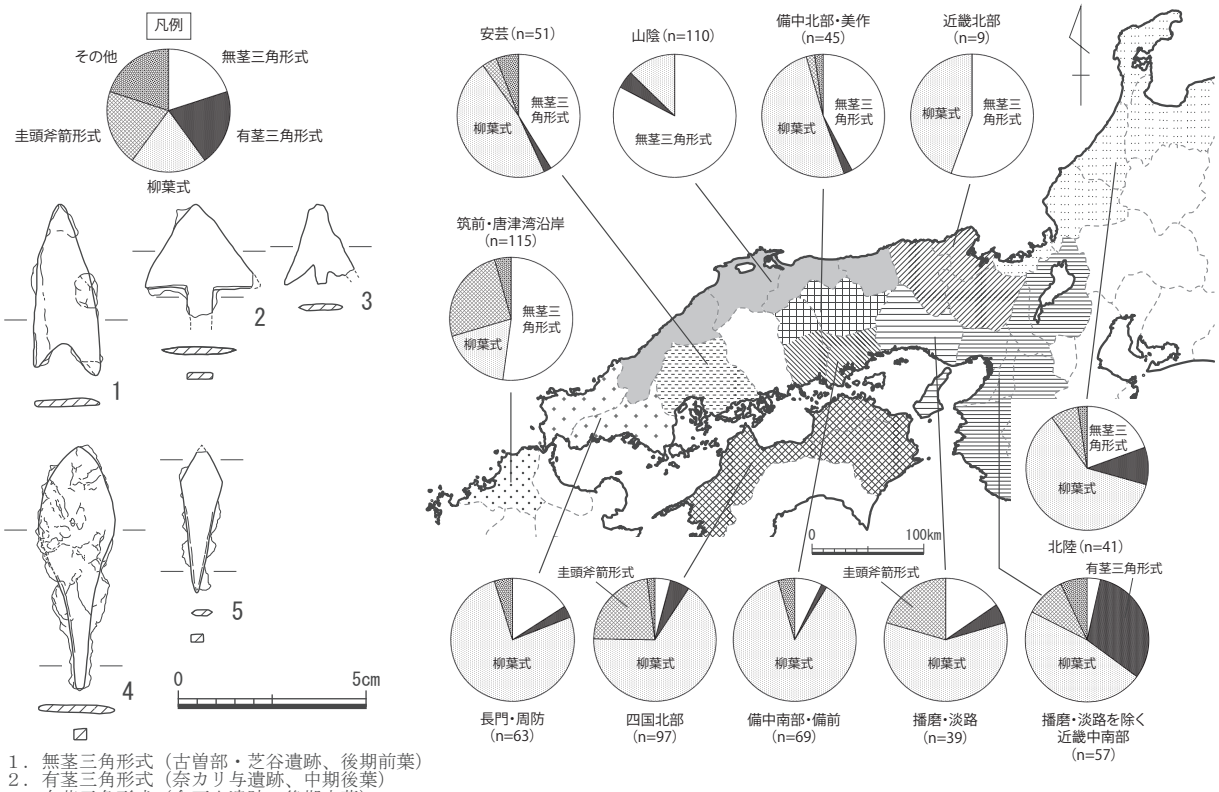
上記でみたように、近畿中・南部の旧国９ヶ国においても一定量の鉄器出土があり、西日本他地域で認められた鉄器流通第２・３波が及んでいたことが判明した。ただし、鉄器流通第３波の時期においては、九州北部および山陰における出土量の半数に満たない。発掘件数の多寡、遺構の残存状況、鉄器の腐植を考慮するとしても、流通量・消費量の実態をある程度、反映したものと解釈したい。近畿中・南部のなかでも、播磨・淡路・摂津・河内など播磨灘・大阪湾沿岸の出土量は比較的多く、和泉・紀伊・大和・山城の事例は少ないことから、臨海地域が、西方からの鉄器流通の波をより直接的に受けた状況を推定できよう。以上のことは、禰宜田佳男氏による近畿の鉄器普及過程４段階の整理と概ね整合している。ただし、弥生後期後葉から終末期にかけての鉄器化状況については、他地域と比較した場合、相対的にどのように評価してよいか、なお課題を残している。本稿では、石器の出土状況について詳細に把握できていないため、鉄器の普及が石器の駆逐と残存にどの程度影響を及ぼしたのかについては、今後の検討課題としておきたい。

３．地域性

（１）鉄鏃（図 10）

鉄鏃の地域性を概括的に捉えると、日本海側の山陰は無茎三角形式、安芸を除く瀬戸内海側の周防・備中南部・備前・四国北部は柳葉式やこれに類似した圭頭斧箭形式などの有茎式が大半を占めており、九州北部は両者が混在する[5]。

近畿をみると、近畿北部では、資料数が少ないため断定できないものの、柳葉式と無茎三角形式が同程度出土しており、柳葉式が多い近畿中部、および無茎三角形式が多い山陰、双方からの影響が及んで



１．無茎三角形式（古曽部・芝谷遺跡、後期前葉）
２．有茎三角形式（奈カリ与遺跡、中期後葉）
３．有茎三角形式（会下山遺跡、後期中葉）
４．柳葉式（五斗長垣内遺跡、後期中葉）
５．圭頭斧箭形式（五斗長垣内遺跡、後期中葉）

図 10　鉄鏃の地域性

いる可能性がある。一方、近畿中部のうち、播磨・淡路では、柳葉式および、これに類似した圭頭斧箭形式が合わせて約79％を占め、無茎三角形式が約15％と続く。山陰で多い無茎三角形式が播磨・淡路で約15％を占めるのは、備中北部･美作を介した山陰からの影響が背景にある可能性を指摘しておきたい。播磨・淡路を除く近畿中・南部では、柳葉式と圭頭斧箭形式が約58％を占め、それに次いで有茎三角形式が約32％を占めている。有茎三角形式は、播磨・淡路・摂津・山城・河内・和泉に分布しており、当地における特徴的な形式となっていることが改めて確認できる（野島1996、松木2003）。

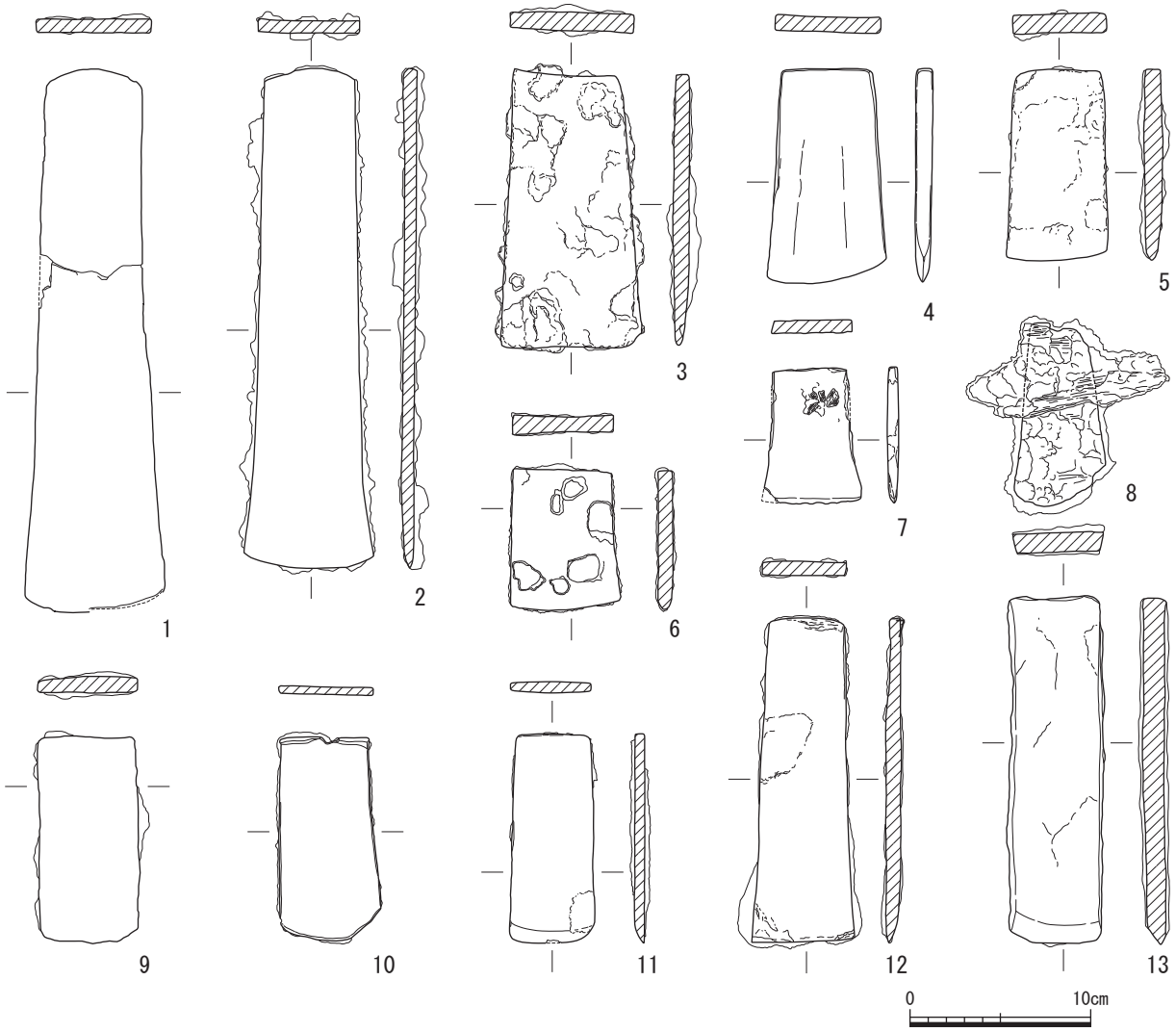
（２）大型鉄斧の分布（図 11・12）

前稿では、主に伐採斧として使用されたと推定される刃幅5.0cm前後を超えるような重厚な板状鉄斧・袋状鉄斧を大型鉄斧とした（会下2019・2020）。弥生中期から後期前葉における大型鉄斧の分布をみると、近畿北部に大型袋状鉄斧、近畿中部に大型板状鉄斧が多くみられる。また近畿以外では、主に山陰沿岸部・中国山地内陸部に分布がある。

鳥取県倉吉市中尾遺跡で出土した弥生中期後葉の大型板状鉄斧（図12- ２）は、基部から刃部にかけてわずかに幅が広がる梯形をなし、側縁が刃部付近でさらに緩やかに外反する平面形態をなしている。これは、同時期の原三国時代前期における朝鮮半島南部出土資料（図12- １）と同様であり、厚みも考慮すると舶載品と評価できる（村上2024）。また、島根県奥出雲町国竹遺跡出土の大型板状鉄斧（図12- ３・５）も、冶金学的分析から軟鋼の心金と硬鋼の皮金の「合せ鍛え」技術による製作であり、舶載品の可能性が高いとされる（大澤2000）。その他の全長が短い大型板状鉄斧資料についても、舶載品の長期使用による摩滅と刃部の研ぎ直し（川越1993:p.44）、折損･切断後の分割品に刃部を研ぎ出す再加工といった過程がある可能性を想定しておきたい。

以上のように大型板状鉄斧が舶載品である可能性が高い点、出土地の分布などを考慮すると、近畿中部で出土するこの時期の大型鉄斧の多くは、朝鮮半島から九州北部を経て、さらに山陰など日本海沿岸を経由してもたらされたものが多かったと推定される。加えて、近畿中部で出土する大型板状鉄斧以外の鉄器全般についても、九州北部から瀬戸内海経由でもたらされたもの以外に、一定量は山陰からの山越えルートで流入していた可能性を想定したい。

図 11　弥生中期から後期前葉の大型鉄斧と銅鐸の分布



1．茶戸里 23 号墳（慶尚南道昌原市、原三国前期）　2．中尾遺跡（鳥取県倉吉市、中期後葉、図11-11）
3・5．国竹遺跡（島根県奥出雲町、中期後葉、図11- 9）　4・7．青谷上寺地遺跡（鳥取市、中期後葉、図11-12）
6．長山馬篭遺跡（鳥取県伯耆町、中期後葉、図11-10）　8．森Ⅵ遺跡（島根県飯南町、中期後葉、図11- 8）
9．元定古墳群（岡山県真庭市、中期後葉、図11-13）　10．奈カリ与遺跡（兵庫県三田市、中期後葉、図11-15）
11．甲田南遺跡（大阪府富田林市、中期後葉、図11-20）　12・13．古曽部・芝谷遺跡（大阪府高槻市、後期前葉、図11-17）

図 12　弥生中期から後期前葉の大型板状鉄斧

結びにかえて～鉄器の広域流通と青銅器埋納

本稿では、これまでに集成・整理した九州北部・山陰・吉備・北陸諸地域に、近畿および四国北部の鉄器出土事例を追加して、鉄器の流通・消費の様相について再検討を行った。その結果、近畿中・南部においても、弥生中期後葉の第２波、弥生後期後葉の第３波とした鉄器増加の波が及んでいたことを認めた。また、鉄器全般の分布や弥生中期から後期前葉における大型板状鉄斧の分布から、近畿中部で出土している鉄器の一定量が山陰からもたらされた可能性に言及した。

このことと冒頭でふれた荒神谷遺跡および加茂岩倉遺跡における大量青銅器埋納との関連性について、想像を交えながら言及しておくことで結びにかえたい。両遺跡がある出雲と銅鐸の多くが製作されたとみられる近畿中部とを結ぶルートとして、本稿でみた鉄器全般や大型鉄斧の分布からは、以下の候補が推定される（図３-２、図11）。一つは、前稿でふれたように出雲から伯耆の日野川を遡上し、四十曲峠を越えて、津山盆地を経由し播磨西部に至る「近世出雲街道」ルート、そこからさらに大阪湾沿岸を東進するルートである（会下2020）。『出雲国風土記』に記述された交通路を参考にすると、出雲から斐

伊川を遡上し、横田盆地から万才峠を越えて伯耆の日野川上流域に至った後、「近世出雲街道」に合流するルートも存在していた可能性がある。また、出雲から日本海沿岸を東進し、倉吉平野から天神川を遡上、人形峠を越えて「近世出雲街道」に合流するルートもあげられる（会下2020）。加えて、鉄器分布が希薄ではあるが、日本海沿岸を東進した後、因幡の千代川を遡上し、志戸坂峠を越えて播磨西部に至る「智頭往来」ルート、但馬の円山川水系や丹後の丹後半島各河川ないし由良川を遡上し由良川水系から加古川・武庫川を下るルートなどもあげられる。想像をたくましくするなら、出雲平野からみた場合、荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡は、西日本各地に通じる日本海ルートや中国山地ルートの起点に位置しているようにも思われる。

こうしたルート上には、美作の念仏塚銅鐸、因幡の上屋敷銅鐸・下坂銅鐸、但馬の気比銅鐸、摂津の桜ヶ丘銅鐸など、加茂岩倉遺跡銅鐸と同笵のものが分布している（図11）。すなわち、鉄器を中心とした地域間の活発な文物往来がバックボーンとなって、同笵銅鐸も製作地から様々なプロセスを経てもたらされているわけである。そして、こうした銅鐸は、弥生中期後葉から後期前葉のある時期に埋納されたとみられる[(6)]。

一方、本稿でみたように弥生後期初頭から前葉の近畿中・南部や山陰における一時的かつ連動的な鉄器出土量の減少、伯耆・播磨・摂津などにおける鉄器分布の希薄化は、弥生中期後葉から後期前葉にかけての時期に地域間の安定的な広域流通を揺るがす何らかの事象が発生したことを示唆しないだろうか。こうした事態と、当該期における各地での銅鐸埋納、ないし荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡、さらには兵庫県神戸市桜ヶ丘遺跡における大量青銅器埋納との間に何らかの因果関係が隠されているのかもしれない[(7)]。現段階ではこの程度の言及に留め、こうした弥生中期から後期にかけての社会変動の様相について様々な視点から今後も追究していくことで、大量青銅器埋納の背景と意味を考えていきたい。

本稿は、島根県古代文化センター・テーマ研究「島根県域における弥生社会の総合的研究」検討会、科学研究費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化Ｂ）「弥生・古墳時代併行期における日韓年代論の再構築と対外交渉の実証的研究（代表・平郡達哉島根大学法文学部准教授）」、島根大学法文学部山陰研究センター・山陰研究プロジェクト「既掘考古資料の集成検討および一括資料群の再検討による山陰地域社会の動態的研究（代表・平郡達哉島根大学法文学部准教授）」の成果をもとにしている。研究メンバーの方々をはじめ、下記の皆様から有益なご教示を得た。記して感謝いたします。
池淵俊一・今福拓哉・岩本　崇・岩本真実・坂本豊治・鈴木七奈・寺前直人・中川　寧・東森　晋・平郡達哉・真木大空・松尾充晶・吉田　広・若林邦彦（敬称略）

【註】

（１）一方、弥生終末期から古墳中期における山陰系土器の分布から、山陰と畿内を結ぶ交通ルートを復元した岩橋孝典氏は、福知山盆地から亀岡盆地を経て京都盆地に至るルートについては、弥生終末期から古墳前期前半頃の山陰系土器が希薄であることを考慮して、当該期における京都盆地へのルートとしては、淀川水系経由を想定している（岩橋 2011）。

（２）律令期においても、『出雲国風土記』『播磨国風土記』『時範記』『小右記』などの史料の分析から、「近世出雲街道」のルートが山陰と近畿を結ぶ主要ルートになっていたと推定されている（大日方 2021、坂江 2011、中村 2011 など）。岩橋孝典氏も、弥生終末期から古墳中期において同様のルートを想定する（岩橋 2011）。

（３）資料集成にあたっては、第 16 回埋蔵文化財研究会事務局編 1984、山田 1989、野島 1996・1997、川越編 2000、中久保ほか 2024 などを底本とした。各地域における出土鉄器の所属時期は、伴出する土器の時期から推定した。土器の年代的位置付け、および各地域型式同士の併行関係は、蒲原 2013 などを参考にして表１・２に示した。各地域における各型式の併行関係は、ズレがあると推定されるが、論旨に影響がない限り捨象している。

表１　九州北部・山陰・近畿のおおまかな併行関係

	筑前 筑後	石見	出雲 隠岐	伯耆 因幡	但馬	丹後 丹波	播磨	摂津	河内	和泉	大和	山城	近江	紀伊
前期 末葉	板付Ⅱ 新段階	Ⅰ-4	Ⅰ-4	Ⅰ-3	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ-3	Ⅰ-3 ～4	Ⅰ-3 ～4	Ⅰ-4	Ⅰ-2	Ⅰ-3	Ⅰ-3 ～4	Ⅰ-3
中期 前葉	城ノ越	Ⅱ-1	Ⅱ-1	Ⅱ-1 ～2	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ-1 ～3	Ⅱ-1 ～3	Ⅱ-1 ～3	Ⅱ-1 ～2	Ⅱ-1 ～3	Ⅱ-1 ～3	Ⅱ-1 ～3	Ⅱ-1 ～2
中期 中葉	須玖Ⅰ	Ⅲ-1 ～2	Ⅲ-1 ～2	Ⅲ-1 ～3	Ⅲ	Ⅲ-1 ～2	Ⅲ-1 ～2 Ⅳ-1 ～2	Ⅲ-1 ～2 Ⅳ-1	Ⅲ-1 ～2 Ⅳ-1 ～2	Ⅲ-1 ～3	Ⅲ-1 ～4	Ⅲ-1 ～2 Ⅳ-1	Ⅲ-1 ～2 Ⅳ-1	Ⅲ-1 ～3
中期 後葉	須玖Ⅱ	Ⅳ-1 ～2	Ⅳ-1 ～2	Ⅳ-1 ～3	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ-3 ～4	Ⅳ-2 ～4	Ⅳ-3 ～4	Ⅲ-4 Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ-2 ～3	Ⅳ-2 ～4	Ⅳ-1 ～2
後期 初頭 ～ 前葉	高三潴	Ⅴ-1	Ⅴ-1	Ⅴ-1	Ⅴ-1	後期 Ⅰ・Ⅱ	Ⅴ-1 ～3	Ⅴ-0 ～2	Ⅴ-0 ～2	Ⅴ-0 ～1	Ⅴ-1 ～2 Ⅵ-1	Ⅴ-1 ～2	Ⅴ-1 ～2	Ⅴ-1 ～2
後期 中葉	下大隈 古段階	Ⅴ-2	Ⅴ-2	Ⅴ-2	Ⅴ-2	後期Ⅲ	Ⅴ-4	Ⅴ-3 Ⅵ-0	Ⅴ-3 Ⅵ-1	Ⅴ-2 ～3	Ⅵ-2	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-3 ～4
後期 後葉	下大隈 新段階	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-3・4	後期Ⅳ	Ⅴ-5	Ⅵ-1 ～3	Ⅵ-2 北鳥池 下層	Ⅴ-4 ～5	Ⅵ-3 庄内0	Ⅴ-4 ～5	Ⅴ-4	Ⅴ-5 ～6
終末期	西新町	Ⅴ-4	Ⅴ-4	Ⅵ-1 Ⅵ-2	西谷3 浅後谷南1		庄内 1 ～2	西摂4 西摂5	庄内式 期Ⅰ ～Ⅲ	下田Ⅱ -1 ～2 式	庄内 1 ～3	山城Ⅵ ～Ⅶ	Ⅵ-1 ～2 Ⅶ-1	第1 ～3 段階

表２　九州北部・山陰・吉備南部・四国北部・淡路のおおまかな併行関係

	筑前 筑後	石見	出雲 隠岐	伯耆 因幡	備中	備前	伊予	讃岐	阿波	淡路 (舟木)
前期 末葉	板付Ⅱ 新段階	Ⅰ-4	Ⅰ-4	Ⅰ-3	Ⅰ-4	Ⅰ-3	Ⅰ-4	Ⅰ-4 ～ 5	Ⅰ-4 ～ 5	
中期 前葉	城ノ越	Ⅱ-1	Ⅱ-1	Ⅱ-1	Ⅱ-1 ～2	Ⅱ-1 ～2	Ⅱ	Ⅱ-1 ～2	Ⅱ	
中期 中葉	須玖Ⅰ	Ⅲ-1 ～2	Ⅲ-1 ～2	Ⅲ-1 ～3	Ⅲ-1 ～3	Ⅲ-1 ～2	Ⅲ	Ⅲ-1 ～3	Ⅲ-1 ～3	
中期 後葉	須玖Ⅱ	Ⅳ-1 ～2	Ⅳ-1 ～2	Ⅳ-1 ～3	Ⅳ-1 ～4	Ⅳ-1 ～2	Ⅳ	Ⅳ-1 ～3	Ⅳ-1 ～2	
後期 初頭 ～ 前葉	高三潴	Ⅴ-1	Ⅴ-1	Ⅴ-1	Ⅴ-1 ～2	Ⅴ-1 ～2	Ⅴ-1 ～2	Ⅴ-1 ～3	Ⅴ-1 ～3	1 ～2
後期 中葉	下大隈 古段階	Ⅴ-2	Ⅴ-2	Ⅴ-2	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-4	Ⅴ- 4ab	3 ～4
後期 後葉	下大隈 新段階	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-3	Ⅴ-4 ～5	Ⅴ-4	Ⅴ-4	Ⅴ-5	Ⅴ-5	5 ～6
終末期	西新町	Ⅴ-4	Ⅴ-4	Ⅵ-1 Ⅵ-2	Ⅸ- c Ⅹ- a ～b		後期 Ⅲ-2	Ⅴ-6 ～8 Ⅵ-1	Ⅵ-1 ～3	7 ～9

（4）岩橋孝典氏は、弥生終末期から古墳中期における但馬と摂津を結ぶルートとして、円山川水系から遠坂峠・加古川水系を経由して武庫川水系に至るルートを想定している（岩橋 2011）。

（5）鉄鏃の形式分類は、大村 1983 による。

（6）松本岩雄 2001 の整理による第Ⅱ群青銅器の分布第Ⅱ段階に埋納されたと考えられる。

（7）渡辺貞幸氏は、荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡の大量青銅器が辟邪の祭器であり、それらの埋納は、弥生中期後葉から末ないし後期初頭頃に出雲周辺の各地域集団を襲ったとてつもなく深刻な危機意識、軍事的な緊張状況の反映と解釈した（渡辺 1998・2000 など）。寺沢薫氏も、桜ヶ丘遺跡や加茂岩倉遺跡の銅鐸埋納が弥生中期末に一気になされたと想定し、「小共同体がもっていた銅鐸が矢継ぎ早に埋納されたり、各小共同体から集められた銅鐸が一ヵ所に大量に埋納された理由は、・・・この時期の政治的、軍事的な緊張を反映している」と考える（寺沢 2000：p.179）。弥生後期初頭ないし前葉における一時的な鉄器流通量減少の背景について、こうした政治的、軍事的緊張に伴う流通ネットワークの途絶、東アジア的視野からみた場合は、前漢・新・後漢という中国王朝交代が朝鮮半島・日本列島の広域流通に与えた影響、といった要因が想起される。もとより、本稿で区分した各細別時期の正確な実年代幅の長短についても追究課題としなければならない。

【参考文献】

岩永省三　1995「神庭荒神谷遺跡出土銅剣形祭器の『細かい研究』」『出雲神庭荒神谷遺跡』島根県教育委員会　pp.275-306

岩橋孝典　2011「山陰から畿内への道（Ⅰ）－弥生時代後期末～古墳時代中期の山陰系土器からのアプローチ－」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター　pp.49-66

会下和宏　2019「弥生時代の山陰地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』第 12 号　pp.1-27

会下和宏　2020「弥生時代の中国地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』第 13 号　pp.43-68

会下和宏　2023「弥生時代の鉄器流通からみた山陰と吉備」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター研究論集第 30 集　島根県古代文化センター　pp.29-43

大澤正己　2000「島根県国竹遺跡出土板状鉄斧の金属学的調査」『島根考古学会誌』第 17 集　pp.145-164

大村　直　1983「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第 30 巻第３号　pp.71-90

大日方克己　2021「山陰地域古代交通研究の現状の課題」『古代文化』第 73 号第３号　pp.68-76

川越哲志　1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版

川越哲志編　2000『弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）』広島大学文学部考古学研究室

蒲原宏行　2013「西日本における弥生土器諸様式の併行関係」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣出版　pp.85-100

北嶋大輔　2010「青銅器の発達と終焉」『弥生時代の考古学』第４巻　同成社　pp.121-138

北嶋大輔　2023「弥生青銅器からみた出雲と吉備～銅鐸を中心として～」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター研究論集第 30 集　島根県古代文化センター　pp.5-28

坂江　渉　2011「『播磨国風土記』からみる出雲・播磨間の交通と出雲認識」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター　pp.17-31

第 16 回埋蔵文化財研究会事務局編　1984『埋蔵文化財研究会第 16 回研究集会発表要旨関連資料集１』第 16 回埋蔵文化財研究会事務局

寺沢　薫　2000『王権誕生』日本の歴史第２巻　講談社

中久保辰夫ほか　2024「播磨の弥生時代金属器関係遺跡集成」『第 23 回播磨考古学研究集会資料集・播磨から弥生社会を問いなおす』第 23 回播磨考古学研究集会実行委員会　pp.153-245

中村太一　2011「『出雲』をめぐる陸上交通路とその多様性」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター　pp.125-136

禰冝田佳男　1998「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店　pp.51-102

禰冝田佳男　2017「近畿における鉄器及び鉄器化とその意義」『平成 29 年度瀬戸内海考古学研究会第７回公開大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会　pp.95-123

禰冝田佳男　2019「近畿における鉄器製作遺跡の再検討」『第３回共同研究会「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－」を語る　発表要旨集』「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－」研究会　pp.8-25

禰冝田佳男　2020「近畿における鉄器製作遺跡の『再発掘』」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－（最終報告書　論考編）』「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－」研究会・「新・日韓交渉の考古学－青銅器～原三国時代－」研究会　pp.363-379

野島　永　1996「近畿地方の弥生時代鉄器について」『京都府埋蔵文化財論集』第３集　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.109-122

野島　永　1997「近畿地方における鉄器の普及とその展開」『第４回鉄器文化研究集会発表要旨集・東日本における鉄器文化の受容と展開』鉄器文化研究会　pp.53-70

福永伸哉　2000「弥生時代の転換期と七日市遺跡」『三万年のメッセージ　七日市遺跡と「氷上回廊」』春日町歴史民俗資料館　pp.51-62

松井和幸　1982「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌』68 －２

松木武彦　2003「古墳出現期の鉄鏃の一様相－腸抉三角形鉄鏃について－」『初期古墳と大和の考古学』学生社　pp.351-360

松本岩雄　2001「弥生青銅器の生産と流通―出雲地域出土青銅器を中心として―」『古代文化』第 53 巻４号　pp.12-25

村上恭通　2000「鉄器生産・流通と社会変革」『古墳時代像を見なおす』青木書店　pp.137-200

村上恭通　2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店

村上恭通　2024「中尾遺跡１号竪穴建物の鉄器とその出土状況」『中尾遺跡第３次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 160 集　倉吉市教育委員会　pp.149-152

山田隆一　1988「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網干善教先生華甲記念考古學論集』網干善教先生華甲記念会　pp.165-192

山田隆一　1989「近畿地方の弥生時代鉄器一覧表」『元興寺文化財研究』29　元興寺文化財研究所　pp.3-8

渡辺貞幸　1998「加茂岩倉遺跡と四隅突出型墳丘墓」『加茂岩倉遺跡と古代出雲』季刊考古学別冊７　雄山閣出版　pp.30-40

渡辺貞幸　2000「古代出雲－動乱の時代から『王国』の時代へ」『神々の源流　出雲・石見・隠岐の弥生文化』大阪府立弥生文化博

物館図録 20　大阪府立弥生文化博物館　pp.90-95

【表１・２文献】

【筑後・筑前】田崎博之　1985「須玖式土器の再検討」『史淵』122　pp.167-202／田崎博之　1996「北部九州－筑前」『弥生後期の瀬戸内海　古代学協会四国支部第 10 回松山大会資料』古代学協会四国支部　pp.27-34
【石見】松本岩雄　1992「石見地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　pp.483-519
【出雲・隠岐】松本岩雄　1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　pp.413-482
【伯耆・因幡】清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　pp.355-412
【備中】高畑知功　1992「備中地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　pp.79-153／高橋　護　1983「山陽」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社　pp.135-174
【備前】正岡睦夫　1992「備前地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　pp.3-78／高橋　護　1983「山陽」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社　pp.135-174
【但馬】谷本　進　1992「但馬地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　pp.319-354／高野陽子　2006「丹後地域－擬凹線文系土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター　pp.225-242
【丹後・丹波】野島　永・野々口陽子　1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（１）」『京都府埋蔵文化財情報』第 74 号　京都府埋蔵文化財調査センター　pp.19-32／野島　永・野々口陽子　2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（２）」『京都府埋蔵文化財情報』第 76 号　京都府埋蔵文化財調査センター　pp.19-34／高野陽子　2006「丹後地域－擬凹線文系土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター　pp.225-242
【播磨】長友朋子・田中元浩　2007「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究所　pp.469-526
【淡路】伊藤宏幸　2020「総括」『舟木遺跡１　Ｂ・Ｄ地区の調査』淡路市埋蔵文化財調査報告書第 15 集　淡路市教育委員会　pp.221-236
【摂津】森田克行　1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社　pp.77-191／森岡秀人・竹村忠洋　2006「摂津地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター　pp.193-224
【河内】寺沢薫・森井貞雄　1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社　pp.41-146／米田敏幸　1991「近畿」『古墳時代の研究』第６巻　雄山閣出版　pp.19-33
【和泉】樋口吉文　1990「和泉地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社　pp.3-76／西村歩・池峯龍彦　2006「和泉地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター　pp.145-175
【大和】藤田三郎・松本洋明　1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社　pp.147-199／寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県文化財調査報告書第 34 集　pp.327-398
【山城】森岡秀人　1990「山城地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社　pp.193-319／吹田直子　2006「山城地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター　pp.67-85
【近江】兼康保明　1990「近江地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社　pp.321-419／伴野幸一　2006「近江地域－野洲川流域を中心に－」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター　pp.49-66
【紀伊】土井孝之　1989「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社　pp.200-279／前田敬彦　2006「紀伊地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター　pp.177-192
【伊予】梅木謙一　1996「伊予」『弥生後期の瀬戸内海　古代学協会四国支部第 10 回松山大会資料』古代学協会四国支部　pp.58-61／梅木謙一　2000「伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社　pp.211-282／柴田昌児　2000「伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社　pp.283-366
【讃岐】真鍋昌宏　2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社　pp.131-210
【阿波】菅原康夫・瀧山雄　2000「阿波地域」『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社　pp.11-130

【遺跡文献】

【筑前・唐津湾沿岸】会下 2023 を参照のこと。
【山陰】中尾：小田芳弘編　2024『中尾遺跡第３次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 160 集　倉吉市教育委員会／その他は、会下 2019・2023 を参照のこと。
【備中南部・備前】会下 2020 を参照のこと。
【但馬】栗鹿：深井明比古ほか　2007『粟鹿遺跡』兵庫県文化財調査報告第 323 冊　兵庫県教育委員会
【丹後】石田谷：岡﨑研一ほか　2014『京都府遺跡調査報告集』第 158 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター／**扇谷**：田中光浩ほか　1984『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町文化財調査報告 10　峰山町教育委員会／**輿**：土橋誠編　1988『近畿自動車道敦賀線関係遺跡（８次区間）発掘調査報告書』京都府遺跡調査報告書第 17 冊　京都府埋蔵文化財調査センター／**桑飼上**：野島永ほか

1993『京都府遺跡調査報告書』第19冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター／**途中ヶ丘**：釋龍雄編　1977『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会／**奈具岡**：野島永ほか　1997「奈具岡遺跡（第7・8次）」『京都府遺跡調査概報』第76冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター　pp.32-82／**林**：高橋美久二ほか　1977『林遺跡発掘調査報告書』網野町教育委員会／**日吉ヶ丘**：加藤晴彦編　2005『日吉ヶ丘遺跡』加悦町文化財調査報告書第33集　加悦町教育委員会

【丹波】国領：村上泰樹編　1993『国領遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会／**七日市**：村川義典編　1984『春日七日市遺跡－確認調査報告書－』春日七日市遺跡発掘調査団ほか

【淡路】大森谷：別府洋二ほか　1985『大森谷遺跡　淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書1』兵庫県文化財調査報告書第27冊　兵庫県教育委員会／**おぎわら**：別府洋二ほか　1997『久野々遺跡』兵庫県文化財調査報告第167冊　兵庫県教育委員会／**久野々**：別府洋二ほか　1997『久野々遺跡』兵庫県文化財調査報告第167冊　兵庫県教育委員会／**五斗長垣内**：伊藤宏幸ほか　2011『五斗長垣内遺跡発掘調査報告』淡路市埋蔵文化財調査報告書第8集　淡路市教育委員会／**塩壺西**：深井明比古ほか　1997『塩壺西遺跡』兵庫県教育委員会／**下内膳**：浦上雅史　1984「下内膳遺跡」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨関連資料集1』第16回埋蔵文化財研究会事務局　pp377-378／**天神**：伊藤宏幸ほか　2017『天神遺跡発掘調査報告書』淡路市埋蔵文化財調査報告書13　淡路市教育委員会／波毛：岡田章一ほか　2000『波毛遺跡・川添遺跡　一般国道28号（洲本バイパス）建設事業に伴う発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第199冊　兵庫県教育委員会／**二ツ石戎ノ前**：種定淳介ほか　2003『二ツ石戎ノ前遺跡』洲本市教育委員会・兵庫県教育委員会／**舟木**：伊藤宏幸ほか　2020『舟木遺跡1　B・D地区の調査』淡路市埋蔵文化財調査報告書第15集　淡路市教育委員会／**山ノ神**：伊藤宏幸　2013『山ノ神遺跡・柚ノ平遺跡発掘調査報告書』淡路市教育委員会

【播磨】相の原：中村剛彰　2012「相の原遺跡」『昭和62年度埋蔵文化財調査年報』佐用町文化財報告書第25集　pp.21-40／**荒田裏神社**：松岡千寿ほか　2001『荒田神社裏遺跡』兵庫県文化財調査報告第221冊　兵庫県教育委員会／**家原・堂ノ元**：吉識雅仁ほか　1983『家原・堂ノ元遺跡』加東郡教育委員会／**居住・小山**：山本三郎ほか　1984「居住小山遺跡（A地区）」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨関連資料集1』第16回埋蔵文化財研究会事務局　p383／**王子城ノ下**：西田猛ほか　2017『王子町内遺跡発掘調査報告書』小野市文化財調査報告第36集　小野市教育委員会／**大中**：上田哲也ほか　1965『播磨・大中遺跡』播磨町教育委員会、山本三郎　1988『播磨大中遺跡発掘調査の概要』播磨町教育委員会ほか、市橋重喜　1988「大中遺跡」『兵庫県文化財調査年報　昭和60年度』兵庫県教育委員会、藤原怜史　2023「大中遺跡・山之上遺跡から出土した鉄製品の紹介」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第16号　兵庫県立考古博物館／**小神芦原**：岸本道昭ほか　1993『小神芦原遺跡』龍野市文化財調査報告10　龍野市教育委員会／表山：深江英憲ほか　2000『表山遺跡・池ノ内群集墳　神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第202冊　兵庫県教育委員会／**貝野前**：大 崇史ほか　1995『貝野前遺跡』中町文化財報告10　中町教育委員会、宮原文隆ほか　2004『中町の遺跡Ⅱ』中町文化財報告30　中町教育委員会／**上菅生**：味呑英和　2003『上菅生遺跡』赤穂市文化財調査報告書58　赤穂市教育委員会／**新宮宮内**：松本正信ほか　2005『新宮宮内遺跡』新宮町教育委員会／**新方・大日地点**：山本三郎ほか　1984「新方遺跡　大日地点」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨関連資料集1』第16回埋蔵文化財研究会事務局　pp381-382／**頭高山**：山本三郎ほか　1984「頭高山遺跡」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨関連資料集1』第16回埋蔵文化財研究会事務局　pp.385-387／**西神ニュータウン No.62**：長濱誠司ほか　2013『神戸市西区 西神ニュータウンNo.62遺跡』兵庫県文化財調査報告第438冊　兵庫県教育委員会／**竹原中山**：渡辺昇ほか　2006『竹原中山遺跡』兵庫県教育委員会／**立岡**：石野博信ほか　1971『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会／**津万**：深江英憲ほか　2019『津万遺跡群3』兵庫県文化財調査報告第503冊　兵庫県教育委員会、別府洋二ほか　2023『津万遺跡群1』兵庫県文化財調査報告第526冊　兵庫県教育委員会／**年ノ神**：長濱誠司ほか　2002『年ノ神遺跡』兵庫県文化財調査報告第235冊　兵庫県教育委員会／**名古山**：秋枝芳　1992「名古山遺跡」『兵庫県史　考古資料編』兵庫県 pp284 － 286／**福本**：岡崎正雄ほか　2008『福本遺跡調査報告書Ⅱ』神河町文化財調査報告書第2集／**本位田権現谷A**：藤木透　2018「兵庫県本位田権現谷A遺跡の鉄器生産」『たたら研究』57号　pp.40-48／藤木透　1998「本位田権現谷A遺跡」『平成8年度埋蔵文化財調査年報』佐用郡文化財報告書第1集　佐用郡教育委員会　pp.8-11／**美乃利**：山中リョウ編　2018『湯之口遺跡発掘調査報告書Ⅳ・美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告29　加古川市教育委員会／**宮ヶ谷**：西安田長野遺跡調査委員会・妙見山麓遺跡調査会　2000『西安田長野遺跡群』／**森本・上島原**：安平勝利　2009『森本・上島原遺跡Ⅱ』多可町文化財報告8　多可町教育委員会／**与呂木**：西口圭介ほか　1994『三木市与呂木遺跡』兵庫県文化財調査報告第133冊　兵庫県教育委員会／**丁・柳ヶ瀬**：深井明比古　1984「丁・柳ヶ瀬遺跡」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨関連資料集1』第16回埋蔵文化財研究会事務局　pp392-393／**六角**：高瀬一嘉編　1994『姫路市六角遺跡』兵庫県文化財調査報告第134冊　兵庫県教育委員会

【摂津】有鼻：長濱誠司ほか　1999『有鼻遺跡　北摂ニュータウン内遺跡調査報告Ⅳ』兵庫県文化財調査報告第185冊　兵庫県教育委員会、深江 英憲　2000『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書6　有鼻遺跡2』兵庫県文化財調査報告第198冊　兵庫県教育委員会／**会下山**：村川行弘ほか　1985『会下山遺跡増補』兵庫県芦屋市教育委員会／**戎町**：山本雅和ほか　1992「戎町遺跡（第4次発掘調査）」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　pp.147-156／**伯母野山**：若林泰ほか　1963『伯母野山彌生遺跡』神戸市文化財調査報告6　神戸市教育委員会／**川除・藤ノ木**：山田清朝ほか　1992『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会／**口酒井**：下條信行ほか　1988『口酒井遺跡　第11次発掘調査報告書』伊丹市教育委員会・古代学協会／**雲井**：西岡誠司ほか　2010『雲井遺跡　第28次発掘調査報告書』神戸市教育委員会／**熊内**：安田 滋ほか　2003『熊内遺跡　第3次調査発掘調査報告

書』神戸市教育委員会／**郡家川西**：森田克行　1981「6L 地区の調査」『嶋上郡衙跡発掘調査概要５』高槻市教育委員会　pp.1-23／**古曽部・芝谷**：宮崎康雄　1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第 20 冊　高槻市教育委員会／**栄根**：岡野慶隆ほか　1982『栄根遺跡』川西市教育委員会／**滝ノ奥**：黒田恭正ほか　1994「滝ノ億遺跡」『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　pp.159-170／田能：福井英治編　1982『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第 15 集　尼崎市教育委員会／**奈カリ与**：井守徳男ほか　1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅱ　兵庫県文化財調査報告書第 16 冊　兵庫県教育委員会／**平方**：篠宮正ほか　1993「平方遺跡」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』兵庫県文化財調査報告書第 125 冊　兵庫県教育委員会　pp.57-204／**紅茸山**：原口正三　1973「紅茸山遺跡」『高槻市史』第６巻　高槻市／**北神ニュータウン No4**：山本三郎ほか　1984「北神ニュータウン No4・No45」『埋蔵文化財研究会第 16 回研究集会発表要旨関連資料集１』第 16 回埋蔵文化財研究会事務局　pp370-371

【河内】池島：阿部嗣司　1984「池島遺跡出土の遺跡について」『埋蔵文化財研究会第 16 回研究集会発表要旨関連資料集１』第 16 回埋蔵文化財研究会事務局　pp.291-292／**瓜生堂**：福永信雄編　2000『瓜生堂遺跡第 47 － 1 次発掘調査中間報告書』東大阪市教育委員会／**大竹西**：西村公助ほか　2008『大竹西遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 106　八尾市文化財調査研究会／**恩智**：今村道雄ほか　1980『恩知遺跡』瓜生堂遺跡調査会／**亀井**：高島徹ほか　1980『亀井・城山』大阪文化財センター、高島徹ほか　1983『亀井』大阪文化財センター、宮崎泰史編　1984『亀井遺跡Ⅱ』大阪文化財センター、広瀬和雄ほか　1986『亀井（その２）』大阪府教育委員会ほか、藤永正明ほか　1987『亀井（その３）』大阪府教育委員会ほか、川越哲志　1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版／**鬼虎川**：芋本隆裕ほか　1982『鬼虎川の金属器関係遺物』東大阪市文化財協会／**甲田南**：小林義孝ほか　1985『甲田南遺跡発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会、今西淳・山田隆一　1994「甲田南遺跡」『平成５年度富田林市内遺跡群発掘調査概要』富田林市埋蔵文化財調査報告書 24　富田林市教育委員会　pp.5-28／**大師山**：網干善教ほか　1977『河内長野大師山』河内長野市教育委員会ほか／**鷹塚山**：瀬川芳則ほか　1968『鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』枚方市文化財調査報告１　鷹塚山遺跡発掘調査団／**田口山**：入江洋ほか　1970『田口山弥生時代遺跡調査概要報告』枚方市教育委員会ほか、宇治田和生　1984「田口山遺跡」『埋蔵文化財研究会第 16 回研究集会発表要旨関連資料集１』第 16 回埋蔵文化財研究会事務局　pp.277-278／**出屋敷**：宇治田和生ほか　1986『出屋敷遺跡Ⅱ調査概要報告』枚方市文化財調査報告第 19 集　枚方市文化財研究調査会／**東山**：菅原正明ほか　1980『東山遺跡』大阪府教育委員会、赤井毅彦　1998『大阪芸術大学グランド等造成に伴う東山遺跡発掘調査報告書』河南町教育委員会／**藤坂東**：谷田博史ほか　1990『枚方市藤坂東遺跡発掘調査概要報告』枚方市文化財調査報告第 23 集　枚方市文化財研究調査会／**藤田山**：瀬川芳則ほか　1976『藤田山遺跡調査報告書（遺構編・遺物編）』枚方史料刊行会／**船橋**：原口正三　1962『河内船橋遺跡出土遺物の研究２』大阪府文化財調査報告書第 11 輯　大阪府教育委員会／**星ヶ丘**：村上恭通　1995「星ヶ丘遺跡の鍛冶鍛冶遺構について～近畿地方における鉄器供給問題～」『みずほ』第 15 号　pp.86-91／**八尾南**：岡本茂史ほか　2008『八尾南遺跡』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 172 集　大阪府文化財センター／**山畑**：芋本隆裕ほか　1983『山畑遺跡第 15 次発掘調査概要』東大阪市文化財協会

【和泉】観音寺山：辰巳和弘編　1999『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告』同志社大学歴史資料館／**惣ヶ池**：石部正志ほか　1970『鶴山地区　信太山遺跡（その２）調査概報』和泉市教育委員会、乾哲也ほか　2023『惣ヶ池遺跡発掘調査報告書』和泉市文化遺産報告 Vol.1／**玉手山**：北野重　1994『玉手山遺跡』柏原市教育委員会／**野々井西**：西口陽一　1994『野々井西遺跡・ON231 号窯跡』大阪府教育委員会ほか／**船岡山**：鈴木陽一ほか　1985『船岡山遺跡Ｂ地点発掘調査報告』泉佐野市教育委員会

【大和】鴨都波：松本洋明　1992「鴨都場遺跡の検討」『みずほ』第４号　pp.2-19／**唐古・鍵**：藤田 三郎ほか　1991『田原本町埋蔵文化財調査年報　1990 年度』田原本町埋蔵文化財調査年報２　田原本町教育委員会／**ゼニヤクボ**：泉武　1989『都祁村ゼニヤクボ遺跡』都祁村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所／**大王山**：伊藤勇輔　1977『奈良県宇陀郡大王山遺跡』榛原町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所／**平等坊・岩室**：北口聡人ほか　2008『天理市文化財調査年報　平成 18 年度』天理市教育委員会／**纒向**：清水眞一　1995「纒向遺跡出土の金属器の新例」『みずほ』第 15 号　p.35、清水眞一　1996「纒向遺跡第 67 次調査出土の鉄斧」『みずほ』第 20 号　pp.26-27／**三井・岡原**：寺沢薫編　2003『三井岡原遺跡』奈良県文化財調査報告書第 94 集　奈良県立橿原考古学研究所／**六条山**：寺沢薫編　1980『奈良市六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第 34 集　奈良県立橿原考古学研究所

【山城】和泉式部町：辻裕司ほか　1991「和泉式部町遺跡」『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所　pp.103-109／**植物園北**：岸岡貴英ほか　1994「植物園北遺跡第 13 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 58 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター／**内裏下層**：國下多美樹ほか　1991「長岡京跡第 238・245 次（7AN4F・4G 地区）第二次内裏内郭南築地回廊・内裏下層遺跡　発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 31 集　向日市埋蔵文化財センターほか／**田辺天神山**：森浩一ほか　1976『田辺天神山弥生遺跡』同志社／**谷山**：福永信哉　1991「谷山遺跡」『長岡京市史』資料編１　長岡京市史編纂委員会　pp.148-157／**中海道**：國下多美樹ほか　1984「中海道遺跡第４次（3NNANK-4 地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 13 集　向日市教育委員会　pp.185-194／**西京極**：柏田有香ほか　2007『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-30　京都市埋蔵文化財研究所、柏田有香　2009「京都盆地における変革期の弥生集落―鉄器生産遺構の発見―」『古代文化』61-3　pp.80-87／**備前**：辻本和美ほか　1998「一般地方道富野荘八幡線関係遺跡（西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前前遺跡）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 81 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター／**南山**：

鷹野一太郎ほか　2010『南山遺跡発掘調査報告書』京田辺市埋防文化 財調査報告書第 38 集　京田辺市教育委員会／**宮ノ瀬**：辻本和美ほか　1998「一般地方道富野荘八幡線関係遺跡（西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前前遺跡）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 81 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター

【近江】正楽寺：植田文雄　1996『正楽寺遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第 40 集　能登川町教育委員会／**高野**：木戸雅寿 1986『高野遺跡発掘調査報告書』滋賀県文化財保護協会ほか、清水尚ほか　1990『高野・辻遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県文化財保護協会ほか／**斗西**：植田文雄 1994『斗西遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第 27 集　能登川町教育委員会、田井中洋介 1996「集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート」『紀要』第９号　滋賀県文化財保護協会　pp.79-84 ／**二ノ畔・横枕**：守山市立埋蔵文化財センター編　1994『乙貞』第 74 号、守山市立埋蔵文化財センター編　1994『乙貞』第 75 号／**南滋賀**：林博通　1993『南滋賀遺跡』滋賀県文化財保護協会ほか／**横枕**：守山市立埋蔵文化財センター編　1988『乙貞』第 39 号

【紀伊】亀川：植田法彦ほか　1985『亀川遺跡Ⅴ』海南市文化財調査研究会ほか／**旧吉備中学校校庭**：川口修実ほか　2008『旧吉備中学校校庭遺跡』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書第１集　有田川町遺跡調査会、川口修実　2010『旧吉備中学校校庭遺跡第４次発掘調査報告書』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書第３集　有田川町教育委員会、川口修実　2023『旧吉備中学校校庭遺跡第７次発掘調査報告書』有田川町文化財調査報告書第 21 集　有田川町教育委員会／**小松原Ⅱ**：久貝健　1981『1980 年度埋蔵文化財発掘調査概報』御坊市遺跡調査会／**橘谷**：大木要ほか　2015『橘谷遺跡発掘調査報告書』和歌山市教育委員会／**田屋**：土井孝之　1981「田屋遺跡」『埋蔵文化財研究会第 16 回研究集会発表要旨関連資料集１』第 16 回埋蔵文化財研究会事務局　p.342 ／**中村Ⅱ**：久貝健　1993『中村Ⅱ遺跡』御坊市遺跡調査会／**西田井**：土井孝之　1992「畿内周辺地域の鉄鎌一例」『弥生文化博物館研究報告１』大阪府立弥生文化博物館　pp.83-88 ／**東田中**：土井孝之　1992「畿内周辺地域の鉄鎌一例」『弥生文化博物館研究報告１』大阪府立弥生文化博物館　pp.83-88 ／**府中Ⅳ**：栗本美香ほか　1996『府中Ⅳ遺跡　第２次発掘調査概報』和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第 15 集　和歌山市文化体育振興事業団／**船岡山**：土井孝之　1986『船岡山遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会

【阿波】カネガ谷：原芳伸ほか　2005『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 62 冊　徳島県埋蔵文化財センターほか／**北原・大法寺**：久保脇美朗ほか　1994『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告６』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第６集　徳島県埋蔵文化財センターほか／**光勝院寺内**：菅原康夫編　1984『光勝院寺内遺跡』徳島県教育委員会／**椎ヶ丸・芝生**：久保脇美朗ほか　1994『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告６』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第６集　徳島県埋蔵文化財センターほか／**庄・蔵本**：中村豊　2003「徳島における弥生時代終末期の鉄生産」『青藍』1　pp.25-36 ／**名東**：氏家敏之　1995『名東遺跡』徳島県教育委員会ほか、大橋育順ほか　2010『名東遺跡・南庄遺跡』徳島県埋蔵文化財発掘調査報告書第 79 集　徳島県埋蔵文化財センター／**矢野**：近藤玲ほか　2006『矢野遺跡Ⅲ（弥生・古代篇）』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 63 集　徳島県埋蔵文化財センター／**若杉山**：岡山真知子編　1997『辰砂生産遺跡の調査－徳島県阿南市若杉山遺跡－』徳島県立博物館

【讃岐】石田高校校庭内：山下平重　2019『石田高校校庭内遺跡』香川県教育委員会／**烏帽子山**：川越哲志編　2000『弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）』広島大学文学部考古学研究室／**稲木**：西岡達哉編　1989『稲木遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　香川県教育委員会ほか／**加藤**：川越哲志編　2000『弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）』広島大学文学部考古学研究室／**彼ノ宗**：笹川龍一　1985『彼ノ宗遺跡』善通寺市教育委員会／**鹿状・中所**：古野徳久 1995『多肥松林遺跡　鹿伏・中所遺跡』高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　香川県教育委員会ほか、西村尋文　2008『鹿伏・中所遺跡』高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　香川県教育委員会／**上天神**：大久保徹也ほか　1995『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　香川県教育委員会ほか／**川津一ノ又**：山下平重　1997『川津一ノ又遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 26 冊　香川県教育委員会ほか／**川津中塚**：西岡達哉　1994『川津中塚遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 14 冊　香川県教育委員会ほか／**旧練兵場**：森下英治 2003『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報１』香川県埋蔵文化財調査センター、西岡達哉ほか　2011『旧練兵場遺跡Ⅱ（第 19 次調査）』独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　香川県教育委員会ほか、信里芳紀ほか　2013『旧練兵場遺跡Ⅲ』独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊　香川県教育委員会、木下晴一ほか　2014『旧練兵場遺跡Ⅳ』独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　香川県教育委員会ほか、森下友子ほか　2015『旧練兵場遺跡Ⅴ』独立行政法人国立善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第５冊　香川県教育委員会ほか、森下友子ほか　2016『旧練兵場遺跡Ⅵ』独立行政法人国立善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　香川県教育委員会ほか、森下英治ほか　2016『旧練兵場遺跡Ⅶ』独立行政法人国立善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　香川県教育委員会ほか、森下英治ほか　2022『旧練兵場遺跡（第 26 次調査）』香川県教育委員会／**久米池南**：藤井雄三編　1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会／**紫雲出**：小林行雄ほか　1964『紫雲出』詫間町文化財保護審議会／**下川津**：藤吉史郎ほか　1990『下川津遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　香川県教育委員会ほか／**成重**：森格也ほか　2004『成重遺跡Ⅰ』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 47 冊　香川県教育委員会ほか、森格也ほか　2005『成重遺跡Ⅱ』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 54 冊　香川県教育委員会ほか／**原間**：山元素子　2002「原間遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成 13 年度』香

川県教育委員会ほか　pp.3-17

【伊予】祝谷六丁場：宮崎泰好編　1991『祝谷六丁場遺跡』松山市文化財調査報告書第 24 集　松山市埋蔵文化財センターほか／**大久保**：柴田昌児ほか　2008『大久保遺跡（大久保・竹成地区・Ｅ地区）・大開遺跡・松ノ丁遺跡（１次・２次）』埋蔵文化財発掘調査報告書第 144 集　愛媛県埋蔵文化財調査センター／**小山田Ⅱ**：中野良一編　1990『小山田Ⅱ遺跡　小山田支群』埋蔵文化財発掘調査報告書第 35 集　愛媛県埋蔵文化財調査センター／**釜ノ口**：大正正風編　1973『釜ノ口遺跡調査報告書』松山市文化財調査報告書第５集　釜ノ口遺跡発掘調査団ほか／**北谷山**：今井信太郎　1983『実報寺黒岩山遺跡・広岡北谷山遺跡発掘調査報告書』東予市教育委員会／**久米窪田Ⅳ**：坂本安光ほか　1981『一般国道 11 号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』埋蔵文化財発掘調査報告書第６集　愛媛県埋蔵文化財調査センターほか／**小富士**：作田一耕編　1991『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』埋蔵文化財発掘調査報告書第 38 集　愛媛県埋蔵文化財調査センター／**釈迦面山**：阪本安光編　1982『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県教育委員会／**拾町Ⅱ**：岡田敏彦編　1980『一般国道 33 号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』埋蔵文化財発掘調査報告書 第２集　愛媛県埋蔵文化財調査センター／**筋違Ｆ**：梅木謙一編　1996『福音寺地区の遺跡　筋違Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・川附』松山市文化財調査報告書第 52 集　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターほか／**筋違Ｎ**：山之内志郎ほか　2001『福音寺地区の遺跡　筋違Ｌ・Ｎ遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書 84　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター／**椋ノ原山**：長井数秋　1986「椋ノ原山遺跡」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県　pp.213-214 ／**谷田Ⅳ**：阪本安光編　1982『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会／**樽味四反地**：髙尾和長ほか　2017『樽味四反地遺跡　23 次調査』松山市文化財調査報告書 186　松山市教育委員会ほか／**樽味立添**：加島次郎ほか　2007『東野森ノ木遺跡１・２・３・４次調査地・樽味立添遺跡３次調査地・樽味高木遺跡７・８・９・11 次調査地・樽味四反地遺跡７・８・９・11 次調査地・枝松遺跡６次調査地』松山市文化財調査報告書 117　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター／**東本**：高尾和長編　1996『東本遺跡４次調査　枝松遺跡４次調査』松山市文化財調査報告書第 54 集　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターほか、相原浩二ほか　2005『東本遺跡６次調査地・桑原遺跡２次調査地・桑原遺跡４次調査地』松山市文化財調査報告書第 105 集　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターほか、相原浩二　2010『東本遺跡 11 次・12 次調査』松山市文化財調査報告書第 143 集　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターほか、相原浩二　2011『東本遺跡９次・10 次調査・小坂遺跡１次～６次調査・中村松田遺跡５次・６次調査』松山市文化財調査報告書第 153 集　松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター、河野史知ほか　2017『東本遺跡５次調査』松山市文化財調査報告書第 187 集　松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターほか／**西ヶ谷**：長井数秋編　1992『奥ノ谷山・西ヶ谷遺跡群』北条市教育委員会／**西野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ**：長井数秋編　1979『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会／**八堂山**：長井数秋編　1972『八堂山』西条市教育委員会ほか／**半田山**：平磯佳子編　1991『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』埋蔵文化財発掘調査報告書第 39 集　愛媛県埋蔵文化財調査センター／**東野森ノ木**：加島次郎ほか　2007『東野森ノ木遺跡１・２・３・４次調査地・樽味立添遺跡３次調査地・樽味高木遺跡７・８・９・11 次調査地・樽味四反地遺跡７・８・９・11 次調査地・枝松遺跡６次調査地』松山市文化財調査報告書 117　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター／**文京**：宮本一夫編　1990『文京遺跡第８・９・11 次調査』愛城大学埋蔵文化財調査報告２　愛媛大学埋蔵文化財調査室ほか、宮本一夫編　1991『文京遺跡第 10 次調査』愛城大学埋蔵文化財調査報告３　愛媛大学埋蔵文化財調査室、栗田茂敏　1992『文京遺跡　第２・３・５次調査』松山市文化財調査報告書第 25 集　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターほか、吉田広編　2005『文京遺跡Ⅳ　文京遺跡 20 次調査・文教遺跡 23 次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告 14　愛媛大学埋蔵文化財調査室、田崎博之編　2014『文京遺跡Ⅶ - ３　文京遺跡 16 次調査Ａ区』愛媛大学埋蔵文化財調査報告 26-3　愛媛大学埋蔵文化財調査室／**松山大学構内**：梅木謙一編　1991『松山大学構内遺跡　松山市道後城北遺跡群第２次調査』松山市文化財調査報告書第 20 集　松山市立埋蔵文化財センターほか、相原浩二ほか　2007『松山大学構内遺跡Ⅳ　６次調査地』松山市文化財調査報告書第 115 集　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターほか／**南久米片廻り**：栗田茂敏　2012『南久米片廻り遺跡・久米窪田森元遺跡』松山市文化財調査報告書 157　松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターほか／**明穂東岡Ⅱ**：多田仁編　1995『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ』埋蔵文化財発掘調査報告書第 54 集　愛媛県埋蔵文化財調査センター／**女夫池**：得居義治　1959「北条市出土の弥生遺物について」『愛媛考古学』３　pp.9-14 ／**四村日本**：谷若倫郎編　1998『四村日本遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第 71 集　愛媛県埋蔵文化財調査センター／**若草町**：土井光一郎ほか　1996『若草町遺跡Ⅱ』埋蔵文化財発掘調査報告書第 60 集　愛媛県埋蔵文化財調査センター

【図出典】（一部改変のうえ、再トレース）

図 10- 1　宮崎康雄　1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第 20 冊　高槻市教育委員会　図 123-B4

図 10- 2　井守 徳男ほか　1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅱ　兵庫県文化財調査報告書第 16 冊　兵庫県教育委員会　図 160- 1

図 10- 3　村川行弘ほか　1985『会下山遺跡　増補』兵庫県芦屋市教育委員会　Fig108-11

図 10- 4・5　伊藤宏幸ほか　2020『舟木遺跡１　Ｂ・Ｄ地区の調査』淡路市埋蔵文化財調査報告書第 15 集　淡路市教育委員会　図 105- ３・９

図 12- 1　李　健茂・尹　光鎮・申　大坤・金　斗哲　1991「昌原茶戸里遺蹟発掘進展報告Ⅱ」『考古学誌』第３輯　韓国考古美

術研究所　pp.5-111　図 21- 2

図 12- 2　小田芳弘編　2024『中尾遺跡第３次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 160 集　倉吉市教育委員会　図 93-F2

図 12- 3・5　田中義昭・石田爲成　2000「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄佁について」『島根考古学会誌』第 17 集　図３-No.38・39

図 12- 4・7　水村直人編　2011『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告６　金属器』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 39　鳥取県埋蔵文化財センター　図 20-F40、図 21-F44

図 12- 6　中原斉ほか　1989『長山馬篭遺跡』溝口町教育委員会　図 200-F600

図 12- 8　山崎順子ほか　2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』島根県飯南町教育委員　図７-16

図 12- 9　山麿康平編　1994『元定古墳群・上野遺跡・大内原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 91　岡山県教育委員会ほか　図 14-I1

図 12-10　井守 徳男ほか　1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅱ　兵庫県文化財調査報告書第 16 冊　兵庫県教育委員会　図 160- 6

図 12-11　今西淳・山田隆一　1994「甲田南遺跡」『平成５年度富田林市内遺跡群発掘調査概要』富田林市埋蔵文化財調査報告書 24　富田林市教育委員会　pp.5-28　図９- B

図 12-12・13　宮崎康雄　1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第 20 冊　高槻市教育委員会　図 123-5004・図 281-5401